

---

# おぞましい鏡

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おぞましい鏡

### 【Nコード】

N1428Y

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

職員室前の鏡におかしな噂が広まっていた。ある先生が当直の日日にそれを確かめると。昔あった裏電EXや田亀源五郎さんの漫画をネタにした作品です。

## 第一章

### おぞましい鏡

とある高校の職員室前にある大きな鏡にだ。怪しい噂が広まっていた。

その鏡を夜遅くに見るとだ。何かがあるというのだ。

「何かって何だよ」

「っていつか学校に夜遅くに行く奴いねえよ」

「そんなの誰が見るんだよ」

「どうしてそんなことわかるんだよ」

これが生徒達の言葉だ。夜遅くに学校に行くことのない彼等のだ。

「大体そんな怪談学校じゃ付き物だけれどな」

「今更そんなこと言われても驚かないっての」

「それこそガチホモスカトロ軍団が町占領する方が怖いよな」

「奈良県のマスコットが日本を侵略してきたりとかな」

彼等は自分達が想像できる中で最も恐ろしいものを言ってみせた。

「だよな。公園のベンチにやらないかの兄ちゃんがいるとかな」

「そっちの方が怖いよな」

「それで何があるんだよ」

「鏡に自分の死ぬ顔が出るとかか？」

真夜中の二時に鏡を見るとそれが出て来るとい話がある。

「それか悪魔が出て来るとかな」

「あれって合わせ鏡にしたらだろ？」

「まあとにかく何があるんだよ」

「どうせ何も無いって」

生徒達にとつてはこの話はこうした大したことのない有り触れた学校の怪談に過ぎなかった。どうでもいいことではしかなかった。

だが、だ。先生達、当直をする彼等から見ればだ。

この噂話はだ。無視できないものだった。

先生といえど人間だ。人間ならそうした話はどうしても気にするものだ。かなり頭の硬い否定論者でもない限りだ。無意識のうちにそうなる。

それでだ。先生達はだった。職員室や飲み屋でだ。ひそひそと話すのだった。

「あの鏡の話は本当でしょうか」

「どうでしょうかね」

「見たって人はいないですが」

「というよりあそこに真夜中に誰も行かないですし」

怖いからだ。当直の見回りでもそこはあえて避けているのだ。誰も。

それで確めた先生はいなかった。だが、だ。

新任のだ。青鷺潤先生、学校では一年のあるクラスの副担任で国語を教えている先生だ。黒髪を女の子で言うボブの感じにして太い眉を整えている。一重のやや切れ長の細い目に広い一直線の口、高く立派な鼻を持っていて白い頬がすっきりした顔の先生だ。何処か韓流スターみたいな感じだ。ただ背は韓国の俳優程高くはなく一七〇程だ。

その先生がだ。笑いながらこう他の先生達に話した。

場は居酒屋だそこでビールをジョッキでぐい、とやってからだ。

先生は言うのだった。

「そんなの何も無いに決まってるじゃないですか」

「じゃあ青鷺先生はですか」

「あの鏡を見ても何も怒らない」

「そう仰るんですね」

「はい。絶対に何も無いですよ」

青鷺先生は笑顔でまた話した。

「そんなの何処にでもあるお話ですけれど」

「実際には何も無い」

「そういうものだっていうんですね」

「そりゃ幽霊とかはいるかも知れませんが」  
先生にしろその可能性は否定しなかった。  
「けれど。そういうのがいても」  
「いても？」  
「大丈夫だっというんですか？」  
「僕実家神社なんで」  
先生が大丈夫だと言う根拠はここにある様だ。  
「一応神主の資格もありますし」  
「御祓いできるんですか」  
「それも」  
「できますよ。御守りも持って行って」  
先生はそれに止まらなかった。  
「兄貴が神社継いでるんですけれど兄貴の奥さんの実家お寺で」  
「ではお札もですか？」  
「貰えるんですか」  
「実際貰ってますし」  
既にあるというのだ。  
「あと神父さんに知り合いがいて」  
「神父さんからは何を？」  
「何を貰うんですか？」  
宗教的にはかなりいい加減な話が続く。日本ならではだろうか。  
「十字架と大蒜と聖水も」  
「吸血鬼が出て来ても大丈夫ですか」  
「そういうのも」  
「流石に木の杭とか銀の弾丸とかは無理ですけど」  
吸血鬼だけでなく狼男の話も入る。

## 第二章

「まあフル装備でいきますんで」

「だから大丈夫ですか」

「あの鏡のところに行っても」

「はい、今度の当直の時にちょっと行って来ますね」

先生はとても明るく言い切った。ビールを飲み続けながら。

そして程なくしてその当直の日が来た。先生は。

まずは畳と粗末な台所でもある水洗い場のある当直室で持って来た本を読みインスタントラーメンの夕食を食べた。当直の先生としては妥当と言える一連の行動だ。

そうしてからだ。真夜中になるのをあえて待つて。

それからだ。懐中電灯を手に校内の見回りに出た。

まずは校門の辺りに校庭だ。静まり返っている学校の中は不気味なものだった。木々が今にも動きそこから何かが出る様に見える。

しかし何も無い。時折虫が見える位だ。そこは何もなかった。

そしてだ。校内もだ。

確かに暗く静まり返り不気味だ。しかしだ。

やはり何も無い。廊下の窓から黄色い月とそれに照らされる雲が見えるだけだ。他には何も無い。

「何もないじゃないか」

いつもの当直と変わらないとだ。先生は思った。そしてだ。

問題のだ。そのだ。

職員室の前に来た。その鏡の前にだ。先生はここで左手の腕時計を見た。時間は。

十二時だ。真夜中だ。その時間に来たのだ。

「さて、何が起ころるやら」

何も無いと確信してだ。先生はその鏡の前に来た。そして。鏡を見た。先生の全身がそこにあった。ただそれだけだ。

やはり何もなかった、こう思いた。その鏡の前を去ろうとした。  
だがここで。急に。

鏡からだ。あるものが出て来たのであった。  
それは何かというと。顔中髭だらけで髪を短く刈った大柄な中年の男だった。

服は着ていない。今時という感じの白ブリーフ一枚だ。そこに黒いナイロンの靴下と皮靴だ。町でその格好に出れば瞬時に通報される姿だった。

その男がだ。鏡から出て来てだ。

先生ににじり寄って来て。不気味な笑顔で言ってきた。

「布団を敷こう、な！」

「ふ、布団!？」

「そう、ここで布団を敷こう」

こうだ。不気味な笑顔で言ってくるのである。

「いいな、それじゃあな」

「布団を敷いて一体何を」

「決まっているだろ。愛し合っただよ」

先生が最も聞きたくないことだった。

「いいか、誰にもばれないようにしろよ」

「あの、僕」

そのブリーフ全身毛だらけの男にだ。先生は真っ青になって言い返した。

「そうした趣味は」

「ないのか？」

「ないです」

そのことをだ。必死に主張した。

「ですから遠慮します」

「おい、それはないだろ」

だが、だ。男はまだ言うのだった。しかもだ。

先生がちらりと見た男の股間は。富士山になっていた。

しかもそこも毛だらけでギヤランドウだ。見たくもない。黒い密林の中に聳え立つ富士山を見てだ。先生は。遂に恐慌状態に陥り。男から逃げた。

「う、うわああああああああっ！！！」

「おい、逃げるのか！？」

「撤退します！」

こう叫んでだ。先生は脱兎の如く逃げ出した。後ろは振り返らない。しかしだ。

追って来る気配は感じていた。何とかそれから逃げようとする。

その中でだ。先生は想像した。若し捕まれば。

「恐ろしいことになる」

己がどうなるのか。それを想像してだった。

余計にダツシュになる。そうしてだ。

その中でだった。前に。

何故か校内の中にベンチがありだ。そこに。

つなぎの作業服を着た男が缶ビール片手にくつろいでいる。黒い髪を短く刈り精悍ない顔をしている。美青年と言ってもいい。

その彼がだ。逃げている先生に対してだ。

作業服の前のジッパーをゆっくりと下ろしてきた。そこから。

狂暴なものを出してきた。剣は異常に大きい。しかも黒く輝いている。

それを見せながらだ。彼は先生に言ってきた。



### 第三章

「やらないか」

「何をやるんですか!？」

「いいのかい、俺ノンケでも食っちまうぜ」

しかもだ。会話はRPGの町の人だった。

「嬉しいこと言ってくれんじやないの」

「言ってますん!」

「こうなりやとことん喜ばせてやるからよ」

そしてだ。男は遂にこう言ってきた。

「いいこと思いついた」

「何をですか!？」

「御前俺のケツの穴に小便しろ」

言うのはこのことだった。

「トイレでな」

「嫌です!」

「おいおい、ここまで来てそれはないぜ」

男は勝手に話を進めていく。しかもだ。

先生はダッシュで走っているのだ。だがベンチは先生の横にあり続けている。そうしてそこに座っている男は先生に話を続けてきているのだ。

だが先生は必死なあまりそれに気付かずだ。男と会話を続けるのだった。

「僕そういう趣味は」

「いいのかい？俺ノンケだって食っちまう男なんだぜ」  
会話は通じない。

「とことん喜ばせてやるからよ」

「ひええええええええええええ!」

先生は男からも逃げようとした。ダッシュのスピードを速める。

すると今度は。

右手にだ。ダンディの口髭の男性が出て来た。髪はお洒落なパーマにしている。スーツも端整に着こなし顔立ちも整っている。だがその人はいきなり服を脱ぎはじめた。そしてそこにだ。

男の子が来てだ。その人の白ブリーフ姿を見て愛しげに呟いていた。

「はじめて見ちゃった、先生の白いブリーフ」

「そんなの見たくないよ！」

先生の心の叫びだ。

「僕トランクスなんだよ！しかも何!？」

先生の目の前でだ。男の子と髭の紳士は。

愛し合いはじめた。またその姿が。

えも言われぬものだった。それを見てだ。

先生は吐きそうになった。ダツシユをしているから余計にだ。

「うう、インスタントラーメンが喉まで」

そのことにだ。悪寒を感じざるを得なかった。しかもだ。

行為の一部始終をだ。先生はダツシユで見せられた。これだけで嫌になる。

おまけにだ。その後ろからだ。

おぞましい声が聞こえてきた。その声は。

「ああ!？生徒の目の前でやられて感じてんのかよ！」

「オカマ先生よ！」

こつだ。おぞましい声が聞こえてきたのだ。

「何だおめえ起ってんのかよ」

「まさか」

先生はその声を聞いてだ。恐る恐る。

その後ろを振り向いた。するとそこでは。

あの髭と毛だらけの筋骨隆々のブリーフ男がだ。やくざ者と思われる男二人に前後から攻撃されていた。男が男にだ。

その恐ろしい光景にだ。先生は。

無意識のうちに動きを止めてしまった。そしてだ。

その行為を見る。やがて。

やくざ者達は男にだ。学生服の男をけしかけてだ。そうしてだつた。

またしても後ろからの攻撃が行われる。それは一度見たら絶対に忘れられないものだった。

しかもだ。立ち止まっている先生の後ろからだ。

今度はだ。こんな声が聞こえてきた。

「商品価値のない者は生きていく価値がありません」

「いいですよ、若し私が女なら」

「貴方の子供を産みたいところでした」

中年、いや初老の男のいやらしい声だった。その声を聞いてだ。

先生はそちらも振り向いた。そこは地獄だった。

初老の太った男が肥満した少年を愛撫していた。いとしげに。

あちこちをさすり舐めそうして愛していた。それを見てだ。

先生は動けなくなった。その先生に。

今度はモヒカンレザー男が巨大な槍、股間にあるそれで若い男を

攻撃し最後は後ろから銃で撃たれてこと切れる姿が出て来た。

さらにだ。犬と脚のない男の行為、拳銃には手足がなくなり後ろ

に己の手を入れられる。様々な地獄絵図を見てしまった。

先生は遂に意識を失った。そしてだ。

目が覚めた時いた場所は。

当直室だった。何時の間にかそこにいた。先生は畳の上で仰向けに寝ていた。

## 第四章

「あれ？見回りに行つてたんじゃ」

このことにだ。首を捻る。だが身体が重い。

まるで鉛の様だ。それでも何とか起き上がりだ。

先生は当直室の周りを見回した。何の変わりもない。

だが昨日のことを思い出してだ。思わず吐きそうになった。

口を右手で押さえる。何とか吐かず済んだ。

それでもだ。昨夜のあのことはだ。全て瞼に浮かんできた。その中でだ。

先生はだ。こう思つたのだった。

「夢だつたのかな」

こう思つた。実際に先生は今当直室にいる。

それでだ。こう思つたのだ。

ところがだ。当直室にだ。あの男がいたのだった。

「よお」

あの髭だらけブリーフ男だ。彼がにこやかに笑つて言つてきたのだ。

そしてだ。男はこうも言つてきた。

「昨日は楽しかったな」

「楽しかったつて」

「結局おめえは誰ともしなかつたけれどな」

このことは先生にとって不幸中の幸いだった。しかしだ。

男はだ。にこやかな笑みのまま先生に言ってくるのだった。

「今度はな。しような」

「夢じゃなかつたんだ……」

男のにやりとしたおぞましい笑顔を見てだった。

先生は遂に気を失つてだ。倒れてしまった。先生が発見されたのは。

学校に来てみて職員室に当直だった先生がいないことに妙に思った教頭先生が当直室に行ってみるとだ。そこにいたのである。

畳の上で青のトランクス一枚で恐ろしい顔で口から泡を吹いて倒れている先生を見つけたのだ。まるでメデューサを見た様な顔だった。

その先生を見てだ。教頭先生はこう声をかけた。

「先生、起きて下さい」

「うう、やらないか」

「やらないか」？

「布団を敷こう、な」

こんなことをだ。青ざめた顔で呟いていた。

「はじめて見ちゃった」

「何を見られたんですか？」

「先生の白いブリーフ」

「先生はトランクスですが」

教頭先生は先生のその青いトランクスを見て突っ込みを入れる。

とりあえず先生のところに来て身体をゆすって起こそうとしている。

そしてだ。それと共にだった。教頭先生自身のことも言った。

「それに私は禪です」

「えっ、禪」

禪と聞いてだ。先生は。

うなされる顔でだ。こう言うのだった。

「赤禪、赤禪の軍人がくんずほぐれっ」

「何ですか、それ」

「生徒の目の前でやられて感じてんのかよ」

先生のうなされる声は続く。

「オカマ先生よお」

「先生のアイドルの好みは大島優子ちゃんだった筈ですが」

教頭先生は先生のアイドルの趣味を知っていた。何故なら自分の机に写真を飾っていつでもそのアイドルの話をするからだ。

## 第五章

そしてだ。ここでも教頭先生は自分のことを話した。

「まあ私は今も松田聖子ちゃん一筋ですが」

「鏡、鏡……」

今度はこんなうわごとを言う先生だった。

「鏡が……」

「鏡？」

「職員室の前の鏡」

先生はさらに言う。

「悪魔の鏡……」

ここまで言っただ。先生はがくりと落ちた。そうしてだ。

すぐに保健室に放り込まれてだ。そこから暫く入院させられた。

何か恐ろしい体験をしてショック症状になったのだと診察された。

そしてだ。退院して仕事に復帰した先生はだ。こう話すのだった。

「職員室の鏡ですけれど」

「あの鏡ですか」

「何かあるんですか？」

「真夜中に近寄らない方がいいみたいです」

こうだ。同僚の先生達に話すのだった。

「そうみたいです」

「あれっ、何かあつたんですか？」

「ひよっとして」

「何もなかったです」

暗い顔になつてだ。先生達に話すのだった。

今も飲んでるがそれでもだ。先生の酒は進んでいない。

ビールをあまり飲まずにだ。先生は話していく。

「ただ。それでも」

「それでも？」

「といたしますと」

「いや、怪談は信じるものですね」

何を見たのか話さないまま話す先生だった。

「それはわかりました」

「何かよくわからないですがそうなんですね」

「怪談は信じてですか」

「あの鏡には真夜中には近寄らない」

「そうするべきなんですね」

「はい、そうです」

こう言っただ。やっとビールを飲む先生だった。しかしそのビールは普段のビールよりもだ。幾分か飲みにくいものに感じられた。そして学園の生徒達だ。肝試しにだ。

その真夜中に鏡の前に行った話を聞いた。そしてだ。

「それで見たらしいんですよ」

「何をですか？」

「何かね。SMスカトロ系のハードガイ軍団を」

教頭先生はこう先生に話す。職員室でだ。

「それに囲まれて迫られるのをです」

「見てしまっただんですか」

「いえ、噂ですけれどね」

こうした話の常である。

「それに迫られて襲われかけて」

「で、逃げられたんですか？」

「もう少しで後ろからも前から攻められるところだったかと」

「危うかったんですね」

「しかも彼等のプレイで」

つまりだ。ホモのSMスカトロである。

「そうなるところだったそうです」

「そうですか。危うかったですね」

「まことにですね」

「本当に怪しい噂ですね」

「ええ、そう思います」

先生はそれは噂ではないと確信した。だが今はそのことには何も突っ込みも入れずにだ。そうしてだった。

話を聞いたただけだった。だがこの噂は広まりだ。もう誰も真夜中にその鏡の前に行こうとはしなかった。あまりにもおぞましい噂なので。

おぞましい鏡

完

2011・8・26



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1428y/>

---

おぞましい鏡

2011年11月2日02時05分発行